

平成24年内に観察したきのこたち

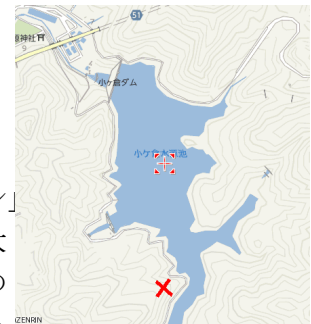
山川 続

(3) ホオベニシロアシイグチ (イグチ科ニガイグチ属)

期 日：平成24年9月29日

場 所：小ヶ倉水源地 (長崎市上戸町4丁目)

この頃はどこも、きのこが大発生していたようです。ここでも、50種を確認しました。この場所は、時々観察に来るんですが、ホオベニシロアシイグチは、初めて観察したきのこです。広葉樹林内の観察場所 (右図の×印) の土手からたくさん生えてました。タイミングが合えば、スオウシロオニタケ同様、珍しいきのこに出会えますね。



名の由来は、「ホオベニ」は孔口が白色から淡紅色になり、「シロアシ」は柄が白いからだと思われまふ。特徴をよくつかんだ命名です。他の大きな特徴として、柄にあらゐ網目模様があることゐす。また、上写真のように、柄基部に黄色のしみができ、茎を切ると下部の方の断面はうっすらと赤くなります。西日本では普通に見られますが、東北や北海道にはないそうゐす。特有の酸味がありますが、調理方法を工夫すれば、おいしく食べられます。

ヤマドリタケモドキに似てゐますが、本種の特徴として、

- ・柄が白っぽく、隆起した網目模様が大きい。
- ・柄基部に黄色のしみができ、下部の肉がピンク色を帯びる。
- ・幼菌時、管孔が菌糸でふさがれない

などがあげられ、区別できます。

(4) タケリタケ (ヒポミセスキン科ヒポミセス属)

期 日：平成24年8月4日

場 所：雲仙・白雲の池 (雲仙市小浜町)

この日は定例観察会で、参加者は少なかったですが、37種を観察しました。このときに見つけたものゐす。最初見たとき、形状からコウボウフデと思ゐ、同定会の時も、コウボウフデとして処理しました。持ち帰って、じっくり見ると、コウボウフデと何か違ふなと思ゐ、傘裏を削って検鏡したところ、右写真のような円筒状棍棒形の子嚢があり、その中に紡錘形で表面が凸凹の胞子が入ってゐました。球形の子嚢胞子をもつコウボウフデとは明らかに違い、タケリタケと同定しました。検鏡しても、同じ属だとよく似てゐて、同定が難しいですが、このようにはっきり違えば、とても助かります。



400倍で見た視野

す。他の菌類に寄生して生活する子嚢菌の属のヒポミセスキンに、テングタケ類が寄生されて奇形になったものが「タケリタケ」です。ベニタケ属やチチタケ属の菌が宿主となっている場合は「ツヅミタケ」と呼ばれることが多く、白雲の池ではツヅミタケは多く観察されます。タケリタケは初めてでしたが、ツヅミタケがたくさん発生するので、タケリタケがあっても不思議ではないですね。タケリタケは、実際には複数のヒポミセス属の菌が寄生しているといわれまふ。